

第六 萩何飯

紫や萩すり衣しほり染

鹿の起臥ゆかた一枚

秋の山ことに難所の峯越て

ほの見る月の舟きらひ也

若子様になく音を添て天つ鷹

真砂かくれに残す人質

同心の袖ふりはえてならひ松

棒杖にきる谷のかた樞

駕籠の者田上山を分過て

わたしまてやい宇治の川つら

大勢と名乗もあへす三百余き

えい／＼わあの村猿の声

山松も火事の煙と立消て

柴つみくたる車長持

細引の二筋見えし雪の道

頸く／＼つたる越の民人

瓢箪も湖水の浪にゆられきて

正猛

集言

柴舟

正信

益春

均朋

益友

宗先[二十三]

本秋

益翁

勝政

正猛

集言

柴舟

正信

益春

均朋

二

朱印の色に月もいさよふ

稻妻のさやもりんすも巻ながら

貨物中間の末の雲霧

あらたむる身躰盛花の山

縁辺むすふ姫桃の陰

水ぬるむ木津のわたりもけはい田

金色のひかり今は臨終

善導の腰より下か冷てきた

法然いかに風呂かた／＼ぬは

一念のねんを離て塗師細工

鬼神は飛さり曳躰の内

豆板見る右の肘を討おとし

いかに和尚のふるう巾着

すつはのかはきう／＼にされされとこそ益翁

舞正かたきの煮売屋のかゝ

通ひ路をうつても行ぬ大津馬

ものとかめし給ふ閑の明神

なかむれは水辺近き手洗水

月のもり来る松の白とり

二ウ下女秋ふく風やさそふらん

わり木枕に待暮の露

鳴虫の哀を告る墓所

野辺より遠の狼の声

益友

宗先

本秋[二十四オ]

益翁

勝政

本秋

益春

均朋

益翁

宗先

勝政

正信

正猛

益翁

集言[三十四ウ]

柴舟

宗先

益友

均朋

益春

正信

勝政

正猛

三

朝ほらけ火繩の煙よこほれて
 風の便にきく芝居取
 村立し松の庵の惣廻向
 旗をあけたる岑の白雲
 くれはとりあやしや鳩かとんてきた
 池田もおなし領分の月
 あたゝめて敵共尽ぬ酒法度
 禪家のいはく袖の紅葉ゝ
 口にくはへ足には踏ぬ花の枝
 胡蝶も共にめくる蛛舞
 春の日を張人形やまねくらん
 灸穴しるく風しつか也
 八專も疊らぬ御代のしるしにて
 曆のおくに分る公事沙汰
 一とせは在鎌倉に暮にけり
 小太郎にとてきうふんのかね
 兄むすこ今立役と成まゝに
 声かはりして御汗かえませう
 町中の算用あひも恋の道
 おもき情のつゝもたせとや
 石火矢の煙くらへん我思ひ
 室の八嶋も今追手口
 有明の影は岩城の黒門に

益友
 柴舟
 集言
 勝政「三十五オ
 益翁
 本秋
 宗先
 均朋
 正信
 益翁
 柴舟
 勝政
 正猛
 宗先
 益翁
 本秋「二十五ウ
 益春
 集言
 宗先
 正猛
 本秋
 益友
 正信

名

露を残して煤や取らん
 三ウ墨跡のあと見えそむる筆つ虫
 親代々よりすむ嵯峨の山
 芹川のなかれをうくる法花宗
 御幸の後も又お日待を
 清めては二たひすめる洗ひ米
 唐土天笠今もあまさけ
 桶の水春日の山にうつされて
 火の用心は誰か家の風
 留主の間に月のかつらもおる斗
 霧をはらひてかへる懸乞
 夕露や矢立の先にこほすらん
 袖はなみたに曾我古郷へ
 村雲の劔に落る花の風
 神爾のひかり永き日の影
 西海の浪にしつんでかへる鷹
 朝のかすみくゝる唐網
 こきよせて死骸尋ぬる蟹小舟
 松に問なん落城のあと
 降つてきた時雨になれば笠置山
 彼上人の袖のむら雲
 一石の文字はかすかに月消て
 露打はらふ銭ものこらす

均朋
 益友
 益春
 集言
 本秋「三十六オ
 均朋
 益翁
 正信
 益友
 勝政
 柴舟
 益翁
 宗先
 正猛
 勝政
 柴舟
 集言「三十六ウ
 正信
 本秋
 益翁
 正猛
 宗先
 均朋

伊勢まいり夕をいそぐ野辺の秋

さうやく馬を引かへる声

柴蒨に義仲御説有けるは

谷の庵にすめる宗匠

べんとつもおなし袂の墨衣

世を捨人もあたまそりさけ

名ウ江戸下り虎臥野路の奥迄も

箱根過たりやもろこしか原

関の者酒宴半の事なるに

きのふも三人女郎はなして

よつほとなせんせうをきやれ恋になら

しろめ鹿子の衣くの袖

松脂の匂ひを残す花の色

その鬢つけや青柳の髪

集言

勝政

本秋

益友

正猛

益春三十七オ

益友

益翁

宗先

本秋

正猛

集言

勝政

均朋

正猛 十 益春 七

集言 九 均朋 九

柴舟 七 益友 九

正信 八 宗先 十

本秋 十

益翁 十一

勝政 十

三十七ウ

二千里のぬけ舟と見ん空の月

葉種端物ころもかりかね

触事に門田の稲葉分くして

吹秋風のかはり狂言

白露の乱れ酒盛其後に

淡茶あはたつ村雲の空

染布子かけてきつらん時鳥

誰か里よりのはい出奉公

竈の下せりきやして薄煙

ね覚さひしきたはこ一ふく

句作りをおもふにつけて女共

名所のはなし嫁の談合

相性も尋あひたる榎葉井に

猶白玉をみかく脇指

あやおりの袖に雹の降敷て

小篠ふみわけあいこの山道

追剣に先にけのひて行螢

乱逆おこる月の夕風

薄霧も立別れたる国境

此辻堂の軒の下露

三味の道筋かほる花ちりて

蒐つみにと乞食四五人

二 弁当に野辺の霞や残らん

集言

正信

正猛

均朋

柴舟

宗先

益春

益翁三十八オ

益友

本秋

勝政

集言

正信

正猛

均朋

柴舟

宗先

益春

益翁

益友三十八ウ

本秋

勝政

益友

第七 月一字露顯

雲雀は雲にあかる絵筵

行水の跡吹送る夕嵐

浦路はるかによする舟着

制札も浪しつかなる掟にて

山林竹木松のむら立

打なひく尾花ましりの知行寺

男鹿の妻や比丘尼成らん

ひんささら乱れ心の秋の風

さあ一をとり月か出たら

飽食の跡はくるしき草のはら

はたち前後の古郷の道

殿の御物志賀辛崎に尋きて

とめ伽羅かほる松の下風

二ツぬれ鷺のみの毛乱てさはき髪

馬かたいそく雪の遠山

葛城の雲を隔る蔵屋敷

竜田のおくに名代のこせる

盗人の心けかれんかたり言

からうして猶望む淨留利

聞及ふよい酒一つさゆ一つ

兩人対座気付こしらへ

産前に戎大黒あらはるゝ

契りし中の相撲の行司

宗先

益翁

正猛

勝政

本秋

集言

益翁

正信

柴舟

本秋

益友

均朋

益春

益友

正猛

集言

柴舟

正信

均朋

益翁

宗先

益春

集言

此かたみ捨ても置れす塗団
ついに世悴かなき跡の月

花蘭や家財宝もよそのもの

山はかすみにけふる大火事

三 たつた今感陽宮も夢の春

胡蝶のたはふれ能かはしまる

しつかなる朝日をうけて洗米

火のものたちや宇治の里人

さらし布りんすちりめん袖はへて

いつかすはいとなれる山姫

岑の雲青い袋にまかひなし

かけ取いそく夕暮のかね

彼町へかよひつくしてあけくには

あら胸くるしや過る付さし

痰はきて泪にむせふ斗也

百足かくるそひとりねの床

とうしてか月こそくらき鞍馬山

紅葉かつ散物取の沙汰

三ツ品玉の雨をみたせる露置て

真砂の末は石なこの石

庭すきや大内山に打むかひ

こかくれてこそ見ゆれつくり木

真那盤の煙にこもる松の奥

本秋

益翁

勝政

正信

益翁

益春

集言

益友

均朋

正猛

柴舟

本秋

宗先

正信

勝政

柴舟

本秋

宗先

正益

益翁

宗先

柴舟

正信

誰か袖一対法の衣手

御むすめこ仏の御名を唱へられ

菜つみ水汲たかれてやねん

猫の子も朝夕なるゝ里離

から鮭ふすほる月のうす霧

野は露のひかりをみかく杵の宮

渋柿こなす森の下陰

張直す葛籠も花もほころひて

追付江戸へ行春の空

かへる鴈名残はつきぬ若衆方

頭巾てしのふ風のたそかれ

置霜の眉から上は見ともない

たとへ刃に草はなひくと

鳴虫の声をかはしてやはら取

二たひ食の露の夕暮

秋の風又跡よりの俄客

はやり大夫か袖にもる月

情あれは歌の心もちくとあり

はなれかたいの旅は道つれ

糊つけて都のかたへ状一つ

うつの山辺に人きつた跡

駿河なる富士の煙に行燈出せ

雲路を分る湯入大せい

名ウタ立やふりさけ見れは檜肴

けふ舟おろし遠の溝川

轆軒綱声をかけたる友衛

二つ釣瓶にこゆるしら浪

末の松待てふ花にまゝ事を

取つき世帯藤咲る門

春霞お引まはしを頼みます

たつや弥生の使者の口上

勝政

益友

正猛

正信

益翁

本秋

均朋

宗先

集言

正信

正猛

均朋

柴舟

宗先

益春

益翁

益友

本秋

勝政

三十二才

第八 栢三字中略

朱硯になかす紅葉や海の物

講尺つゝく浦山の秋

影うすき月をむかへて燭台に

押込棚や霧にかくるゝ

呉服所の軒端をみかく露の暮

正信

均朋

集言

宗先

正猛

草の袂に残る袖判

旅枕ひそかにめくる勢揃

宿一番にやせたれと馬

かり駕籠て形見の品々送られて

丹波口より別れ路の末

尼寺の鐘うつゝなきうき契

うらみはいとによれる漫陀羅

靈室に行ては帰るかへりては

給仕人よふはりこしの内

大座敷夕日の影や入ぬらん

万句はしむる淡路嶋山

茶たはこのしるしの煙立のほり

小遣帳に見えぬ月の夜

伊勢講もめくるそなたの露時雨

此村中にわたる鴈かね

花の雲幾重を分て御借米

飢饉にのこる嶺の白雪

なふ悲しや春さり衣追剣に

空はかすみの酒代か有か

鴈かへる声をしるへに宿はいり

矢田野ゝはらや身持成らん

下紐に赤い跡付あらち山

心中つくの鹿の妻こひ

益翁

柴舟

本秋三十二ウ

益春

益友

勝政

正信

均朋

集言

宗先

正猛

益翁

柴舟

本秋

益春三十三才

益友

勝政

益春

柴舟

宗先

益翁

勝政

本秋

絵双紙に千種の色を書分て

露の庵に残る腰張

疝気病身にしみわたる秋の風

くまなき月の貞青うして

雲迄も吹屋の煙晴つくし

からうすひゝく遠近の山

牛頭馬頭のかしやくもつもる今朝の雪

松の下道いそげとこそは

二ウひたるいは食をたかぬか杉の門

あらはたらきや三輪の山本

犁の跡をひかへてしたひ行

星をちらりとよい女房見て

射的の弓矢八幡はれました

家中にをゐて衆道の取沙汰

利根なるてつちかあればやつこ有

はしかゝりから各別のもの

新敷起句にむすふ松一本

作り咄しを夕暮の月

玉ゆらの露分衣簀本家

二番はえとは庭の村萩

半蔵の軒さしかゝる花散て

のほり階子に春惜む山

二 雨もりも留てなかるゝ薄霞

益友

益春

集言

宗先三十三ウ

正信

益友

正猛

均朋

益翁

宗先

本秋

柴舟

正信

集言

均朋

益翁三十四才

益春

正信

正猛

均朋

勝政

益友

集言

三つめ錐には角組る芦

浪分る入江の舟の番匠籍

太子以来の沖津汐風

こゝをきれかしこをおろす松の枝

碁石となりし真砂乱るゝ

田鶴あそぶ敷を当座の算用に

やんしゆはしむる小田のますらお

高円の里に落来る荒若衆

恋のはうたも敷嶋の道

三味線に浮世の事をあらはして

夢物かたりのこる定紋

袍衣おろすかの古塚の野辺の月

大わらひして狐冷し

三ッ蘭菊の花のかほりかふうんふん

鼻かみ捨て露そこほるゝ

初段よりはりはりあけくきりくす

笛うちしめす水壺の岡

約束の時分うかかふ妹をきて

ひとつの利劔に小指きらうそ

仏さへ報ひをしれる生れ落

法のおしへや鮫の入粒

白妙は象牙の色の雪の山

骨かたつたか遠の雲霧

勝政

宗先

正猛

均朋

益春「三十四ウ

益友

益翁

柴舟

本秋

正信

益友

正猛

宗先

益翁

均朋

益友

本秋「三十五才

集言

益春

勝政

益翁

正信

正猛

瘦しゝな背中を過る初嵐

図法師いつれ月人おとこ

咲花の比も今は葉見せ

二条通もかすみ一筋

本丸に春吹風の音絶て

黄糸白糸石はしる滝

水玉やさんこはくの珠数ならん

功德池あれは阿弥陀経有

泥の色こかねの岸にいたるへし

ちよくもこふかき宇治の山陰

飼置し籠の鶉も声立て

尾花かたよる御召の乗物

十念を請に出ぬる野辺の秋

薄霧分る大蛇の勢ひ

唐墨の雲に残りし今朝の月

はさみ肴もにほふ山風

もとはは梢の杉のへき一枚

目見えかあはは明る関の戸

名ウ新参者木丸殿は爰かとして

斎の宮の勝手しらさる

雪隠や如何にまかへる松の陰

此御座舟に浪こさしとは

門跡の下りを問ふて行衛

本秋

勝政

宗先

柴舟

益春

均朋「三十五ウ

益翁

宗先

正信

本秋

柴舟

正猛

集言

益翁

益友

正信

勝政

集言「三十六才

宗先

勝政

正信

本秋

正猛

こふくめ白き雪の朝明
暖簾の嵐に花の香を留て
もゆるわらひの餅屋煮売屋

益友
益翁
益春

正信 十 正猛 九
均朋 八 益翁 十一
集言 八 柴舟 七
宗先 十 本秋 九

益春 八
益友 十
勝政 九

〔三十六ウ〕

第九 木葉何爪

磯山や風生くさき木葉蝶
浪も時雨に染付の鉢
行燈の下のひかりも夕暮て
螢乱るゝ軒の壁土
草の屋も今引かへて瓦ふき
野を分衣質を取るゝ
落札の跡吹月の朝嵐
竹材木の松陰の露
納屋蔵の表をとつる蔦柵
出見せにしたる岩かねの床

均朋
宗先
正信
益翁
集言
本秋
正猛
益友〔三十七オ〕
柴舟
益春

二

荒熊の声おそろしき喰通ひ
芝居を取に行谷かくれ
鞍懸にむかへは高き三笠山
神輿をとむる赤の玉垣
幾度か爰によるへの水を出せ
杉たつ門やところてんうり
巾着切尋給へといひ捨て
法の道しる開帳の秋
入月や只一筋に善の綱
霧はけふりに葬礼の跡
塩水に山路の花の露散て
うかひをしたる今朝の春風
精進もへよつとおちては鳴雲雀
豊良の寺をいつ出来心
入相のかねふきあけて女良買
明日もやきかん鞞殿の義を
又公事に取むすひてもうき思ひ
跡より恋かせめて見せましよ
君しゆかはたとへ如何なるしやく馬も益翁
越の白山こゆるねりもの
大戦しるしの竿に取添て
名乗て出るあつはれ御器量
時鳥若衆さまとは聞ました

勝政
均朋
宗先
正信
益翁
集言
本秋
益友
柴舟〔三十七ウ〕
勝政
正猛
益春
均朋
宗先
益春
本秋

鬢付にほふ雨の夕暮

月に雲嵐を送る風呂あかり

湊の秋にしくや草氈

二ウ討頭に今の哀は鴈の声

紅葉ぬ松も生る千本

ならしては地築をしたる常盤山

奥の岩屋の庭のしつこい

垢離を取流の末も泉水に

伊豆奈の法にもひく浮草

詫ぬれば身をはやつせる辻放下

いまはたおなし薙四五枚

注文に先吹出しの綿のたて

江戸廻船や秋の初風

露の玉鉄砲かたく改て

月もる松に生鶴その外

禁中のためしは花の賀の祝ひ

かすみの衣烏帽子直垂

春風もしつかをとめ給ふかと

友うくひすに太夫天神

呉竹の奥も床しき座敷つき

伏見の里に直す文臺

櫛箱の鏡にうつる宇治の山

平もとゆひや滝の白糸

益友

集言

柴舟

宗先

益翁

益友

正信

本秋

正猛

益春

宗先「三十八ウ

柴舟

本秋

益翁

均朋

勝政

集言

均朋

宗先

集言

益翁

柴舟
正信「三十九オ

つれわきの袖にかつ散村栴

浄留利一たん秋風の声

お日待の床あらはなるかた鶉

三寸の徳利もかたふける月

舟玉も浪にうかへる淡路嶋

ものいはひする須磨の蜃人

光君おもふ弥生の三日の日に

かすみをそめて送る千語文

三ウ春の夜の夢をわすれぬ張枕

旅乗物の窓の梅か香

国替の跡に残れる峯の雪

魂さつて一むらの雲

鳴神やこはい咄しともろ共に

おもふ中をもさくる蜜夫

別れには鸚鵡の鳥も音を添て

巴の字なしてや付さしの酒

さまと我しれぬ名所をくり返し

露一むすひうろたへられた

此相撲月に成ならいかな事

あらそふ虫も位まけまい

なかもやる垣根は花の揚屋町

誰かそらなきの涙春雨

名
ぬる墨の雲も霞もなかれきて

益春

正猛

宗先

本秋

益翁

益友

勝政

益春

正信

益翁

本秋
正猛「三十九ウ

益友

均朋

勝政

宗先

柴舟

益春

益翁

正信

集言

柴舟

正猛

吉野、山も眉をきつはり
 はこひては柴折くふるへつついに
 御下屋敷や冬籠るやと
 津国の難波の事も寄合日
 遊ひたはやれよい茶を入て
 極楽は余所にはあらず隠元派
 卒都婆の文字も一くたり物
 長崎も隣とならは見てきたい
 吹笛の音ちやるめらの声
 ともられて猩、舞をまはふよふ
 如何に蒔絵師せくまい、
 貝しけみ碁ははや負になられたり
 先ふるまひとゆふ浪の月
 名ウ町代を尾花か袖やまねくらん
 ふるい袴に露の衣手
 駒せめて嵯峨の、かたて落たけな
 清滝川の末の科人
 ふり積る雪女ならうかふまい
 作意になをす松の村立
 花は山とかく料理は魚に有
 当地にまれな雉子は焼鳥

均朋 十 集言 八 柴舟 八

均朋 宗先 十
 正信 九
 益翁 十一
 益翁 十一
 益翁 十一
 宗先 十
 柴舟 八
 本秋 十
 均朋 十
 均朋 十
 本秋 十
 集言 十
 正信 四十才
 均朋 十
 益友 十
 勝政 十
 柴舟 八
 本秋 十
 均朋 十
 宗先 十
 勝政 十
 益春 十
 正猛 十
 益翁 十
 本秋 十

第十 雪灰何

焼塩や雪に吹なす籠の下
 一生御遊の月寒る庭
 けふは芝居朝の雲の跡もなし
 水茶のなかれ浪しつか也
 音信る、嵐の風もよはり鯉
 ことに温気の夕日か、やく
 旅の泊いづれも羽織とらせられて
 その岩かねの枕もてこい
 ウ松ひとり腕に力は覚えたり
 鞆はきれてあとの山風
 雲はる、麓の里のこけらふき
 台尻いそく夕暮の空
 痲癩を打詠れば飛螢
 図法師ほそき芦の下風
 磯の浪よりくる太刀のぬんか紙
 さゝくる沓か鴨の村鳥

宗先 十
 正信 九
 益翁 十一
 益翁 十一
 益翁 十一
 宗先 十
 柴舟 八
 本秋 十
 均朋 十
 均朋 十
 本秋 十
 集言 十
 益友 十
 正信 十
 本秋 十
 均朋 十
 均朋 十
 宗先 十
 勝政 十
 柴舟 八
 正猛 十
 益春 四十一ウ
 集言 十
 益友 十
 正信 十
 本秋 十
 均朋 十
 均朋 十
 宗先 十
 勝政 十
 柴舟 八
 正猛 十
 益翁 十
 本秋 十
 正信 十

〔四十一才〕

今朝はふる霜の衣も紫衣と成

両門跡の園の白菊

能太夫秋吹風のさそひきて

御紋の時服月をいたゞく

広蓋に朝一へんの花を請

大間鍋にこほす春雨

二 小田返すいづれもけふは骨折しや

草の庵にたのみもてくる

捨る身も情残りてくほり札

十炷香の香はいつち行らん

御はなしも今聞さして時鳥

ちと小用に立花の陰

何とやら昔の人もこほり腹

よはひわたりてなさぬ借銭

しのひよるもぬけの衣のから大名

素襖袴も今はあた也

入間川もつての外によい機嫌

田面の鳥を鷹かしてやる

使者男かやうくのへの月

露をみかける大小にこそ

二ウはか踊庭の村萩分くて

既喧嘩ときはく秋風

益友

集言

益春

正猛[四十二才]

柴舟

勝政

宗先

集言

正猛

均朋

本秋

勝政

益翁

宗先

正信

柴舟[四十二才]

均朋

益翁

益友

益春

宗先

正信

雪こそくたれ昼食時分

所化部屋の詠につゞく篠隱

鉄鉢かきして年をへにけり

甲武者立よるかけは鏡山

神輿舟こく水海の面

挑燈に猶龍灯や照すらん

仏の御弟子秋の夜遊

発句には鷺の高根の空の月

筆をつ取て宮木引露

花の枝をはこふ仕丁に髭つくる

かすまぬ御調備ふ人參

吸物のはしもとるに雪消て

揚屋の座敷軒の春風

長枕乱れてかゝる柳髪

大石やるそ道辺の末

とんで行天狗かあれは狐有

七つの年より蓬生の宿

わきもこか殿かほしいとうたふたり

鳴原かよひ土はふめとも

一乱に籃乗物もあらはこそ

源平たかに棧敷取して

海の面十町斗大矢かす

益友

集言

均朋

正猛

本秋[四十三才]

益友

益翁

益春

勝政

正信

柴舟

益翁

集言

宗先

均朋

益春

柴舟[四十三才]

本秋

宗先

均朋

益友

正猛

引導の声すむ月の夕千鳥
追腹切し霜の小衣

三ツ山風木葉みたりに衆道事

直言坊主落る谷川

鑪なくころ／＼ころやおんころや

礫あないちさて露の玉

秋風の手習もはや夕あかり

紙屑籠に紅葉かつちる

燭台の油こほれて月落て

御座舟ゆりあげよする白浪

ねり物を弁慶すてに押隔

これもや八尺の羽二重の絹

またくらにふんとしならて叶ふまし

死骸さかしてかねをせしめう

此城もやふれて跡は花に風

山は赤坂梅はくれな井

盗賊にひとくとと鳥の声つけて

鎖ねちきつた柴の戸の内

地黄煎入日のかけにおなし色

錢瘡あらふ沖津浪風

漁火のかけにたゝすむ端女郎

小杉になみた落す真砂地
ひねり文見るに悲しき鳥の跡

正信

勝政

集言

益春

益翁

柴舟

本秋

益友

勝政

集言

宗先

正猛

均朋

正信

益春

益翁

宗先

本秋

勝政

正猛

集言

まゝ母つらき姫松の陰
住吉や岸のこなたに借屋して
近所を頼む敷嶋の道

こいさかひ中やはしくる事も有

大盃に又おいとしば

牛若も先あん餅をまいりませ

鞍馬の山の杉折の月

貴布禰川水引に有秋の色

つむ綿帽子に露を乱るゝ

小娘も遠方のへを詠やり

おとこ心のかよふ篠隈

義理順義寄麗に通す沢水も

老中さまや千世の友鶴

うこきなき太山の花に松平

六十余州のとかなる民

益友

益翁

勝政

本秋

集言

益春

柴舟

勝政

本秋

均朋

宗先

正信

正猛

益翁

益友

宗先

正信

益翁

益友

均朋

集言

(以下一九頁下段)

一四十五ウ

鳴聞に明る奥のやま川

嵐雪

綱代とて柘木を運ふ秋の暮

杉風

茶の覆漏る月そやさしき

濁子

陸奥の礎はいつをさかりなる

孤屋

馬みな売て笠破れけり

全峯

戸たゞけは女あるしの立出る

ソラ

つゝら切さく絹の薫

其角

箱根山ふたりか中の闇路にて

而已

子の佛のさめてうつゝか

仙化

石仏あられもあらぬ繩をかけ

釣雪

雨の夜更き庚申の塚

北鯤

何鳥も鳴ねは聞ぬ空なれや

嵐蘭

うか／＼ふねに帆かけてそ行

孤屋

師を友に橋をへたゝる花盛

其角

幸ます公をまねく初梅

嵐雪

補遺、清濁の問題につき、棚町知弥氏よりカ、ヤクは近松ではすべて清音となつており、それは藤井博士の全集の序文に指摘があるとの御教示を賜つた。従つて、現在のところ元祿頃にはカ、ヤクの例がないのではないかという推定はかなり確実性があるようである。又「細道」のカ、ヤクは清音のままにして差支えないことは云う迄もない。尙、氏はムツマシ・ソ、クにつき清濁両様の表記の近松作品中に存することを指摘された。棚町氏に深謝したい。

(本学専任講師)

(四八頁よりつづく)

追加八句

炉路入や衣にすれる松桜

勝政

うら付草履雪消る跡

友淨

鶯に手斧つかひの声添て

慶閑

とき舟よする岸の村竹

栄親

おも見せ小見せ通ふ鹿の音

可敬

水茶屋に幾年月の影すみて

公木

遊山人立盤昌の秋

素敬

大坂高滝以仙興行

益乘

延室五

已霜月吉日

深江屋

太郎兵衛板行

四十六才